

時代を超えて・・・近畿の土木遺産シリーズ
大阪町人の心意気を伝える

戎橋

えびすばし



江戸時代の戎橋「浪華の賑ひ」より

瀬戸内海の水運や琵琶湖から流れ出る淀川水系。

関西は昔から水運が発達し、大江戸の八百八町に対抗して言われるようになった浪華の八百八橋。実際の橋の数は江戸時代には約200位で、昭和40年ごろには約1500、現在でも約800あります。人々の暮らしも水とともにあったといえていいでしょう。

『日本書紀』の仁徳条には記録に残る日本最古の橋として

「猪甘津(いかいのつ)に橋為(わた)す
即ちその処を號(なづ)けて
小橋(おばし)と曰(い)ふ」

という記述を見ることができます。*1)

この小橋に始まる浪華の八百八橋は暮らしに欠くことのできない大切な施設として人々に親しまれてきました。このように古くから近畿の暮らしを支えてきた土木遺産を紹介する企画が本号よりスタートします。

第1回目は、浪華の八百八橋のひとつ、ミナミの素顔とも言える戎橋を紹介します。

*1)

現在の大阪市生野区桃谷付近は、かつて猪飼野(いかいの)と呼ばれており、周辺には小橋(おばせ)という地名も残っています。また、近くには「つるのはし跡」の石碑があり、この「つるのはし」がこの小橋ではないかという説もあります。

今も昔も戎橋はミナミの賑わいの中に

一日中人の流れが絶えることのない大阪・ミナミ。中でも道頓堀界隈は全国的に知られた繁華街で、戎橋はいわばそのシンボルともいえる橋です。ワールドカップで日本が勝利した夜や阪神タイガースがセ・リーグ優勝を決めた際、大勢の市民が集まったのもこの橋周辺。おなじみのグリコの看板も彩を添え、メディアへの登場回数は数ある大阪の橋の中でもナンバー・ワンといってよいでしょう。

この橋が最初に架けられたのは、今から約400年前。1615年(元和元年)に完成した道頓堀川の開削とはほぼ同時期と考えられています。

橋名の由来は読んで字の如く「戎神社」に由来します。今宮戎に通じる橋であるところからこの名がついたという説が一般的ですが、このほかに「拱津名所図会大成」には、古くこの地では毎年正月に西宮戎

神社の神像を立てて人々の信仰を促したことからこう呼ぶようになったとする説も紹介されています。橋ができて間もない江戸時代の初めには「十日戎」も定着していましたから、市内から戎神社に詣でる人で橋が賑わったと思われます。

これに拍車をかけたのが、1626年(寛永3年)に出された橋の南側に芝居と遊郭の設置をしてもよいとする許可でした。これにより橋が架けられた当初は空き地も残る寂しい土地であった界隈は芝居の街、遊興街として発展し始めました。芝居や色町へと繰り出す人、千日墓地へと墓参する人、戎神社に参詣する人と、戎橋筋は当代随一の繁華街へと変貌していったのです。江戸期に作られた『浪華の賑ひ』には多くの善男善女で賑わう戎橋の様子が絵入りで紹介されています。



浪花道頓堀川作繁栄之図

コラム

～道頓堀の開削者～

日本橋の北詰に道頓堀の開削を顕彰して建てられた石碑があります。碑は道頓堀の開削者として安井道頓、道ト(どうぼく)の功を称えています。近年の研究が明らかになりつつあるところによればこの通説はどうか疑問の可能性が高いようです。この検証は1976年の「道頓堀川裁判」を通じて行われたのですが、その過程で開削者として浮かび上がってきたのは平野の有力者であった成

安道頓なる人物でした。この道頓が東横堀川と木津川を結ぶ運河開削に着工し、道頓の死後、安井九兵衛(道ト)と平野藤次郎が事業を引継いだというのが一応の結論です。運河は当初「新堀」と呼ばれていましたが、大坂城落城後に大坂を支配した松平忠明が道頓の功績を評価して「道頓堀」と名付けたということです。



【戎橋】橋 長:36.1m
有効幅員:10.9m
総費用:約5万円

昭和54年にリフレッシュ工事が行われ、橋面には茶色と黄土色のタイルを用いた矢掛模様の舗装が完成した。これは、道頓堀にゆかりある芝居を連想させるデザインとして採用された。現在架け替え工事が計画中。景観に配慮した設計が広くプロポーザル方式により進められている。

浪華の町衆によって支えられていた町橋

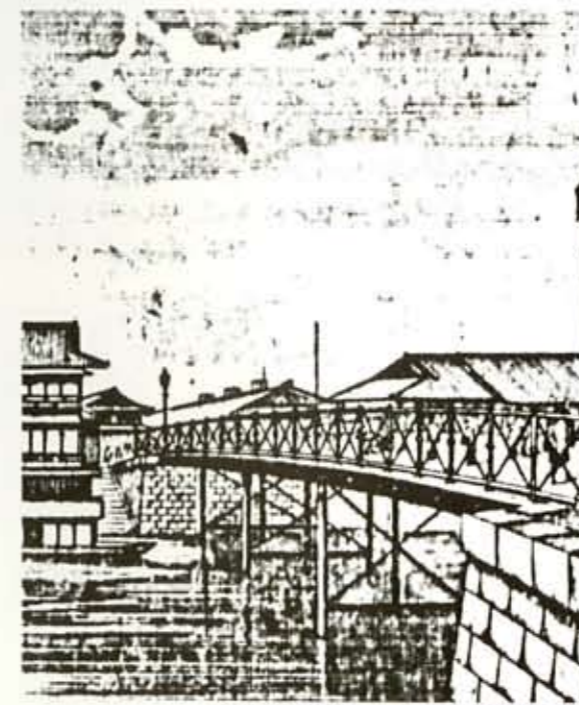
多くの日本の橋と同様に戎橋も木製であったため、江戸時代には何度も架け替えられました。大坂の橋は、お上（江戸幕府）が管理する公儀橋と町人が管理を任された町橋に二分されますが、戎橋は町橋であったため、橋周辺の町々によって維持管理されてきました。補修はいままでもなく、何年かに一度は新たに橋を架け替える費用も発生します。いわゆる「橋普請」です。古文書等の記録によれば、受益者負担を原則に町衆はその都度納得のいく分担方法話し合いで決めていたとされ、大坂の町人と橋の密接な関わり合いが垣間見られます。

最も古い戎橋修理の記録は1694年（元禄7年）、以後1878年（明治11年）に鉄橋として付け替えるまでの間、平均14年に一度、修理もしくは付け替えが行われたそうです。

先人達がかけがえのない社会を守り、支えていくために考えた知恵、市民が必要とする施設を市民がお金を出し合って整備し維持していく…これこそ社会資本整備の原点と言えるでしょう。



戎橋の工事記録で最も古い「道頓堀戎橋修理入用帳之写」元禄7年（1694年）全工事費用の2分の1を四つの芝居小屋で分担し、残り半分を菊屋町と橋詰の四つの町（橋本町）の5町で出費することになっていた。



明治11年、鉄橋になった戎橋「大阪名所独案内」

モダンな鉄橋から、川面に映えるアーチ橋まで

1878年、大阪市内でもいち早く鉄橋に付け替えられた戎橋は、橋長約39.8メートル、幅員は約7.8メートルで、橋に続く道幅と同じ広さにまで拡張されました。新しい時代を迎えても往来は一向に衰える様子なかったことがわかります。

現在の橋は、1925年（大正14年）9月に第一次都市計画事業による橋梁耐震化事業によって架け替えられました。鉄筋コンクリート製の道頓堀を一跨ぎするアーチが特長で、本体のアーチ部と高欄部をつなぐ部分には花崗岩による化粧が施されています。また、石造りの高欄の欄間には青銅製の飾り格子がはめ込まれ、橋詰めに立つ灯柱とあわせてモダンな雰囲気を醸し出しています。

歩行者専用道路になっている橋上は、今日も買い物や観光を楽しむ老若男女で一日中大変な混雑ぶりです。足を止めて、川の流れるに目をやる人の姿が目につくのは、ひと頃に比べれば道頓堀の水質がきれいになったことと無縁ではないでしょう。

石造りの重厚さを持ちながら川面に優しく映えるアーチ橋は、建設から80年経った今でも多くの市民の生活を支え、水の都・大阪に欠かせない景観のひとつとして愛されています。

現在でもクルージングやボート遊びなどは行われていますが、さらに楽しめる街づくりをめざして道頓堀水泳大会など、プール感覚で親しめるようなより一層の水質浄化が進められています。大阪の魅力ある街づくりが叫ばれる中、早期実現に向けて環境の保持、改善に土木事業が果たすべき役割はますます高まっています。

参考資料：松村 博 著 「大阪の橋」

大阪の橋の由来を詳細に記述。また、橋の文化史誌としても興味を喚起する力作。著者の松村氏は、現在、財団法人大阪市都市工学情報センター理事長。

